

「夏本紀」と九州(上)

高橋 庸一郎

一、「夏本紀」の構成

太史公はその「自序」に、「維れ禹の功は九州を攸同し、唐虞の際を光やかしめ、徳は苗裔に流る。夏桀は淫驕にして、乃ち鳴條に放たる。夏本紀第二を作る」とあるように、全体としては禹の功績を讃え、桀の暴虐を明示して、夏の滅亡の顛末を明かにしようとしたのが「夏本紀」である。しかし「夏本紀」そのものは前部分の禹の功を称揚する記述が大部分で、後の夏桀の淫驕については、次の「殷本紀」の方が寧ろ詳しいくらいであり、ここでは極く簡単に、「桀は徳を務めずして百姓を武傷し、百姓堪えず。迺ち湯を召して之を夏臺に囚え、已にして之を釋す。湯は徳を修め、諸侯皆湯に歸し、湯遂に兵を率いて以って夏桀を伐つ。桀鳴條に走り遂に放たれて死す」

と記するのみである。しかし、それ程禹の功を褒する記述も実はその大部分は、『尚書』の「皋陶謨」や「禹貢」と重なっている。

そしてその他の部分は、「五帝本紀」のくり返しとあとは禹から桀への帝位の系譜によって占められているのみである。そこで「夏本紀」の要件は、なりゆきとして当然「皋陶謨」と「禹貢」に収斂されることになる。「皋陶謨」は主に帝としての舜の政治理念、帝舜につかえそれを助ける臣としての皋陶、禹の政治思想が記されている。よってここには帝としての禹の統治思想はない。更に加えてここに記された皋陶、禹の政治思想は前の「五帝本紀」に記された帝堯舜のそれと同質のものであり、またその延長されたものであるということを考えて、「夏本紀」と言い、夏禹といわれながらも、その禹自身の存在は非常に影の薄いもののように思われて来ることに注目すべきであろう。次いで「禹貢」に記されていることは、五服の制、貢賦の制、治山治水の土木工事の概要及び夏の政治的統治範囲としての九州に関する地理的記述である。それでは存在感の薄い禹にとってこれらの制や地理的記述はどういう意味を持っているのか。敢えて言うならばそれらは禹その人とは殆ど何の関係もないであろう。五服の制は恐らく後人の中原統一国家を想定した場合の

統制組織構造の理想を表わしたものであり、貢賦の制も同じくそうした場合の理想的な貢賦のあり方を想定したにすぎないであろう。またその極めて広範にして大規模なる治水工程のあり様も、実際には現実存在する各水系のあり方を中原統一の統治者を想定し、その積極的な統治治水意志から出発するという目で見た場合の一つの地形解釈なのであろう。上記のような観点から「禹貢」をみるとその記述で重要なものは、

「禹九州を別ち、山に随い川を濬にし、土に任じて貢を作る。禹土を敷き、山に随い木を刊り、高山大川を奠む」

という序に直結して記されている所の「九州」の概要を述べた部分である。こうしてその部分は、「史記・夏本紀」に、用字用語についての多少の相違があるが、全体としてはほぼ同主意の文がとられている。いまそれをここに挙げ、その注釈に基づきながらそれぞれの場所を位置づけてみよう。

二、九州の位置

1、冀州

「夏本紀」は先ず冀州をあげている。

「冀州既に載し、壺口より梁を治め岐に及ぶ。既に太原を修め嶽陽に至る。覃懷功を致し、衡漳に至る」

「集解」によれば、「鄭玄曰く、地理志に、壺口山は河東、北屈縣の東南に在り、梁山は左馮翊、夏陽に在り、岐山は右扶風、美陽

に在り」とある。「北屈」は現在の「吉県」のあたり、「左馮翊」は現在の「鄭県」のあたり、「右扶風」は現在の「扶風県」の右側であるから、今の「感陽市」の西方三十キロぐらいであろう。「正義」には、「括地志に云く、壺口山は慈州、吉昌縣の西南五十里冀州の境に在り。梁山は同州韓城縣東南十九里に在り、二山は雍州の境なり」とある。この「吉昌縣」というのが今の「吉縣」であろう。

「韓城」は「洛陽市」の北西約百五十キロ程の所にある。「太原」については、「集解」は、「太原は今郡名と為る」とし、「嶽」については、「太嶽は太原の西南にあり」とする。また「索隱」は、「嶽は太嶽なり。既ち冀州の鎮、霍太山なり。按ずるに、地理志に、霍太山は河東、彘縣の東に在り」としている。「霍県」はいまの「彘縣」とほぼ同位置にあり、「大霍山」は現在の「臨汾市」の東三十キロのあたりである。また「正義」には、「括地志に云く、霍太山は沁州の沁原縣西七八十里に在り」とある。「沁原縣」というのは恐らく現在の「沁県」のことで、「上党郡」の北五十キロの所にある。また「覃懷縣」について「集解」は、「孔安國曰く、覃懷は河に近き地名なり。鄭玄曰く、懷縣は河内に屬す」とある。「河内」は「雒陽」の東約七十キロ付近で、後に「懷縣」と称された地点である。故に「索引」は「河内に懷縣有り、今地を驗ずるに名に「覃」無きであろう。蓋し「覃懷」の二字は當時共に一地の名と爲す」と言っている。とすると、このあたりには汾水、沁水があり、これ等はどちらかと言えば縦流しており、漳水が黄河とほぼ平行して横流する部

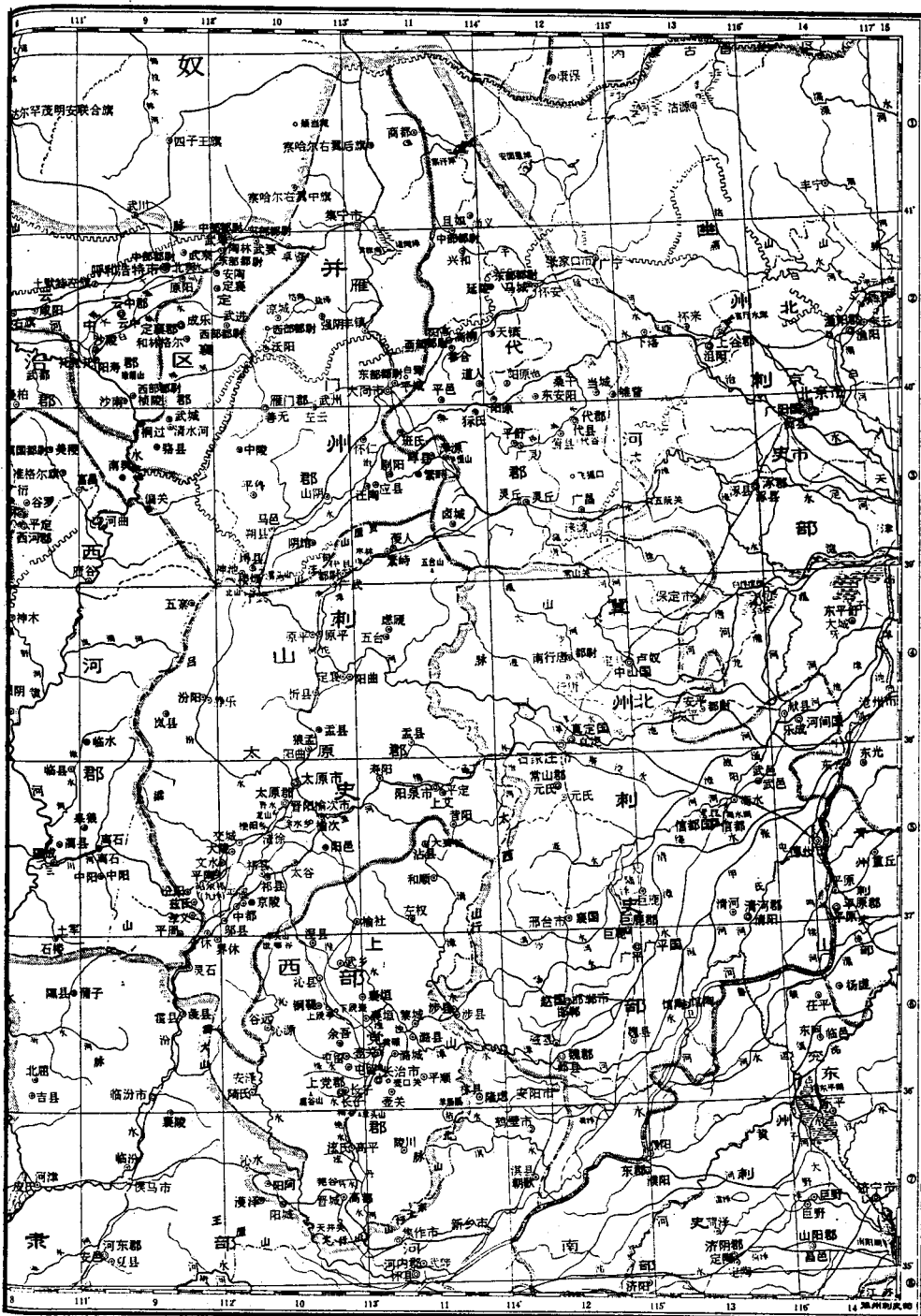
分を持つということとは大きな特徴と言える。また「索隠」には、「案ずるに、孔注は衡を以て横と爲す。非なり」とあるが孔注は、「横」を「衡」の通假字として用いているとしているのではなく、「横流」という動詞を言っているのである。「索引」はつづいて、「王肅云く、衡、漳、は二水の名なり。地理志に、清漳水は上黨、沾縣の東北より出で、阜城縣に至りて河に入る。濁漳水は上黨、長子縣の東、滹に至りて清漳に入るなり」とする。「沾縣」は現在の陽泉市の南約三十五キロにある。阜城は現在徳州市の北約三十キロの所にある。実際にはこのあたりで清漳水が黄河の本流へ入ることはなかったものと思われる。また「正義」には、「括地志に云く、故懷城は懷州、武陟縣の西十一里に在り。衡漳水は瀛州の東北百二十五里の平舒縣の界に在るなり」とある。「武陟縣」は「河内郡」にあり、また「平舒」は勃海に注ぐ滹沱川の北あたり、現在の大城附近である。

『呂氏春秋・有始』には「兩河の間を冀州と爲す。晉なり」とし、高誘の注には、この「兩河」について、「東は清河に至り、西は西河に至る」とある。『爾雅・釋地』もほぼ同文で、「兩河の間を冀州と曰う」とあり、郭璞の注は、「東河より西河に至る」とある。春秋期の晉は、現在の新絳に都を置いたからやほりにここに言う冀州に一致する。ただ朝歌を都とする衛もこの晉のすぐ東側にありこれもやはり「兩側間」に当たる。清河は滹沱の上流に当たりここにいう漳水とおよそ一致する。

『周禮・夏官』には、「河内を冀州と曰う。其の山鎮を霍山と曰

い、其の澤藪を揚紆と曰う。其の川は漳、其の浸するは汾潞」とある。鄭氏の注には、「霍山は彘に在り。揚紆の所は未だ聞かざるに在り。漳は長子より出ず。汾は汾陽より出ず。潞は歸德より出ず」とある。この「霍山」は前掲「嶽」についての「史記」の「索隠」の「大霍山」或いは「正義」の「霍太山」のことであるし、「彘」は同じく「索隠」の「彘縣」のことである。「汾陽」は現在の「靜樂」の汾水を隔てた対岸の地点である。「潞」については、現在の「黎城」附近に「潞縣」があり、それは濁漳水に面しているから、恐らく漳の別流か、その上下流に於ける別名であろう。因みに『周禮』の「山鎮」と言うのは鄭注によると、「鎮は名山にして地を安んずるの徳ある者なり」とし、「浸」とは、「以つて陂と爲り狹漑す可き者なり」とする。即ち「潞」は「漳」の流れのうちで農業用に修堤されたものの一名称であろう。

以上まとめてみると、冀州とは現在の山西省、河北省を中心とする所で、黄河が北から南に向かって大きく直角に曲がり下流に至って、今度は大きく再び孤を描きながら北に向かい、天津の辺りで海に注ぐ、この南流する黄河とやがて北流する黄河との兩河に挟まれた地域である。しかし、冀州の北境は定かではない。『本紀』には、「碣石を夾右して、海に入る」という一文があるが、この碣石を冀州の北界と考えてよいかどうかは明かでない。この「碣石」について「集解」は、「孔安國曰く、碣石は海畔の山なり」といい、また、「徐廣曰く、海は一に河に作る」ともいう。「索隠」には、「地理志に云く、碣石山は、北平、驪城縣の西南に在り。太康地理志云く、



樂浪、遼城縣に碣石山有り、長城の起つ所なり。又水經に云く、遼西、臨渝縣の南水中に在りと。蓋し碣石山に二有り、此に云う、「碣石を夾右して海に入る」は、當に是れ北平の碣石なり」とある。「北平郡」というのは現在の遵化を中心とする唐山市などを含む地域である。「樂浪」は已に朝鮮半島に踏み込んだ所であるから、ここにいう碣石はこの樂浪の地ではないと思われるが、しかし下文の、「長城の起つ所」というのは恐らく山海関を言ったものと思われ、そうであるならばこの場合の碣石も現在の秦皇島附近ということになり、「本紀」にいう碣石と一致することになる。そうすると冀州の北境は、およそ山海関から始まる所の後の長城に沿ったラインということになって随分と広範囲な地域を含むことになる。

2、沈州

「濟、河維れ沈州なり。九河既に道びき、雷夏既に澤にして、雍、沮會同す。桑木は既に蠶し、是に於て民は丘を下りて居土を得」と「本紀」にある。

「集解」には、濟、河について、「鄭玄曰く、沈州の界は此の兩水の間に在るを言うなり」とある。ここに言う「冀州」や「沈州」などの、その境界は当時そんなにはっきりしたものではなかったはずである。いま黄河と濟水はほぼ平行して走っており、冀州はこの黄河を堺として北側であるから、沈州はおよそその南側の地であろう。その時沈州の側からみてその境界線は、黄河か濟水かのあたりになるという意味である。「雷夏、雍、沮」について「集解」は、

「雍水、沮水は相い觸して此澤中に入る。地理志に曰く、雷澤は濟陰、城陽縣の西北に在り」とする。濟陰は後に大野沢と呼ばれた巨大な沢の西にあり、その北の成陽と呼ばれていたのがこの「城陽」なのであろう。「雷澤」はこの成陽のすぐ西に広がる沢である。「索隱」に、「爾雅に云く、水の河より出ずるを雍と爲すなり」とあるから、雍水は黄河の支流である。「正義」に、「括地志に云く、雷夏の澤は濮州、雷澤縣の郭外の西北に在り。雍、沮の二水は雷澤の西北の平地に在るなり」とある。「濮州」と言うのは恐らく濮陽附近であろう。濮陽は濮水に臨み、その濮水は大野沢に流入する時期もあるから、この「雷夏」は或いは「大野澤」と同一視されているかもしれない。

『呂覽』には、「河、濟の間を兗州と爲す。衛なり」とある。高注に、「河は其の北より出て、濟はその南を經る」とあるが、そうすると衛は河の南にあることになるが、河の南はむしろ齊、魯の地であり、衛は河の北になるはずであるから、『呂覽』の記述は春秋末期の有り様を示しているのである。

『爾雅』には「濟河の間を兗州と曰う」とあり、郭注には、「河東より濟に至る」とある。これは「禹貢」の記述と一致している。『周禮』には「河東を兗州と曰う、其の山鎮を岱山と曰い、其の澤藪を大野と曰う。其の川は河、沛。其の浸するは盧維なり」とある。鄭氏注には、「岱山は博に在り。大野は鉅野に在り。盧維は當に雷雍爲り。字の誤りなり」とある。「岱山」とは泰山のことであるが、これは確かに博島の北にある。「大野」は、濮水、濟水、汶水など多

くの大川が集まる巨野沢である。「沛」は沛である。『正字通』に、「沛、本と沛に作る」とあり、『説文』に、「沛、沈なり、東して海に入る」とする。また『玉篇』には、「沛、今濟に作る」とある。即ち「沛」は濟水のことであり、つまり「濟河の間」と言うのと同じである。しかも「沛」は「沈」であるから、そもそも「沛は」沈州の名の由来でもある。盧維は雷雅であるとすると、それは当然雷夏のことであろう。雷夏は「浸」する所であるから、人工的に手を加えられた灌漑用の沢であり、その規模も大野に比して小さいものであるから、時に大野と同一視されることもあったのであろう。

以上まとめてみると、沈州は東流して山東半島の北、勃海へ流れ込む黄河と、そのすぐ南を流れる、これもやはり勃海へ注ぐのであるが、濟水にはさまれた地域である。しかし実際には濟水の南側のちの魯の地も含んでいたようである。西は河内あたりを堺としていたのであろう。全体としては冀州ほど広い地域ではない。

3、青 州

「海、岱維れ青州なり。壻夷既に略し、濰、淄其れ道びく。其の土は白墳、海濱は廣き瀉にして、厥の田は斥鹵なり」と「本紀」にある。この青州について「集解」は、「鄭玄曰く、東は海より、西は岱に至る。東嶽を岱山と曰う」という。即ち海と岱にはさまれた地域である。岱山は固より泰山である。「正義」に、「按ずるに、舜、青州を分けて營州、遼西及び遼東と爲す」とある。『爾雅』には「青州」と言う呼称がなく「營州」とあるのはそれを採っている

のであろう。「壻夷」について「集解」は、「馬融曰く、壻夷は地名。用功少きを略と曰う」とする。「索隱」に、「孔安國云く、東表の地は岫夷と稱す。按ずるに、今文尚書及び帝命驗並に禹鐵に作り遼西に在り、鐵は古の夷字なり」とある。後には夷は「東夷」と言われ東方の異民族を指す言葉として用いられるがもともとは東表、遼西の地をさし、やがてそこに住む異族の総合的な名称となったものと思われる。「濰、淄」について「集解」は、「鄭玄曰く、地理志に濰水は琅邪より出ず、淄水は泰山、萊蕪縣、原山より出ず」という。琅邪は秦始皇に纏る琅邪台石刻で名の有る所である。琅邪及び琅邪台は現在の青島市から膠州灣をまたいで更に海岸線を五十キロ程南下した所にある。濰水は濰邑のすぐ北を流れて勃海に注ぐ濰水のことと思われる。淄水は泰山山脈の最も東の端にある原山から発して萊蕪を経て、更に臨淄、博昌を通って沭水に合するのである。「索隱」は、「濰水は琅邪、箕縣より出で、北は都昌縣に至りて海に入る。淄水は泰山の萊蕪、原山の北より出でて、東は博昌縣に至って濟に入るなり」とある。濰水の発する琅邪は、琅邪台ではなく、そこから少し内陸部に入った所の琅邪郡とよばれる地区のことであろう。また「正義」には、「括地志に云く、密州莒縣、濰山は濰水の出ずる所なり。淄州、淄川縣の東北七十里の原山は、淄水の出ずる所なり。俗に傳えて云く、禹水を理めるの功畢りて、土石黒く、數里の中波漆の若し。故に之を淄水と謂うなり」とある。泰山の北に現在濟南市があり、さらに沭水を越えて北上し、濰水を渡った所に、そこは青州ではあるが、禹城がある。そして、また淄博市

のすぐ西には「于陵」というのがあるが、これは恐らく「禹陵」だったのではなからうか、このあたりには禹にまつわる伝承が多いということにも注目したい。また「海濱は廣き瀉」というのは、山東半島の南岸、黄海に向うあたりは山岳地帯で地形が全体的に高くなっており、そこから流れ出す河川はすべて北流して渤海に注ぐ。例えば胶水、維水、漑水、丹水、などがそれであるし、更に沈州から勃海へ流れ込む多くの河川、それは沈州の九河と言われ、馬融によれば、徒駭、太史、馬頰、覆釜、胡蘇、簡、絜、鉤盤、鬲津などであるが、それ等と相俟って、これ等の河川が運んで来る大量の土砂が「廣き瀉」となって堆積しているのである。「斥鹵」について「集解」は、「鄭玄曰く、斥は地の鹹鹵を謂う」とある。「説文」には、「鹵、鹹地なり。東方は之を斥と謂い、西方は之を鹵と謂う」とある。所謂アルカリ土壌である。海に堆積した土地である所以である。「史記」のこの「斥鹵」の語は「説文」によると東方と西方との両方の言い方を列していることになる。これに対して「書、禹貢」はこの部分を、「厥の土は白墳にして、海濱は廣き斥」というように東方語「斥」のみを用いている。それは禹貢にまつわる伝承が東方、この山東あたりをその発生源としていることを示唆している興味深い。太史公司馬氏はもとも周、晉、秦と係わりを持ち、遷は長安で長じている。「斥」の語は遷にとつて馴染めなかったのであろう。よって「鹵」という東方語もつらねて一語としたのであろう。

【呂覽】に「東方を青州と爲す。齊なり」とある。齊は臨淄を都

としており、泰山以東一帯を領域とし、南は琅邪郡あたりをその境としていたから、齊はだいたい青州に一致する。

【爾雅】には前に記した如く「青州」という呼称はなく、「營州」となっている。「齊を營州と曰う」郭注は、「岱より東して海に至る。此れ蓋し股制なり」とする。果たして股制によるのかどうかは判然としない。卜辞や金文に營の字を見出すことは出来ないから、恐らく股制ではないであろう。また秦漢を通じて九州を言う書で、青州を營州というのは「爾雅」のみであるように思われる。「讀史方輿紀要」などに、「舜、帝位を攝し、禹に命じて水土を平かにせしめ、冀青の地の廣きを以って、冀東恆山の地を分かち、并州と爲す……又青州の東北を分かちて、遼東の地を營州と爲す」などがあるのは、「五帝本紀」に帝舜について、「肇めて十有二州とし、川を決す」とあることに由来しているようだが、「五帝本紀」にはその十二州がどういふ名称であるかは書かれてはいない。「集解」には、「馬融曰く、禹は水土を平かにし、九州を置く。舜は冀州の北の廣大なるを以って、分けて并州を置く。燕、齊遼遠は、燕を分けて幽州を置き、齊を分かちて營州と爲す。是に於て十二州と爲すなり」と説いている。しかしそれも別に根拠あるものではない。

【周禮】は、「爾雅」の「營州」を採らずに「禹貢」の青州を採っている。「正東を青州と曰う。其の山鎮を沂山と曰い、其の澤藪を望諸と曰う。其の川に淮泗、其の浚するは沂沭」という。この場合の正東の「正」とは洛陽、長安を中心とした周からみてという想定である。鄭注に、「沂山は沂水の出ずる所なり。蓋、望諸、明都

に在るなり。睢、陽、沐は東莞に出ず」とある。「周禮」のこの記述をそのまま青州と考えるとこれは「禹貢」に見える青州とは位置が大部南にずれてくる。「沂山」は鄭注にあるように沂水の出る所で、泰山の南東、蓋県にある後に沂源といわれる所であろう。「望諸」は或いは「盟諸澤」ではあるまいか、だとするとそれは豫州の方へ入り込んだ所で、大野沢の南方約五十キロの所梁國の内になる。そうすると望諸は泗水の南側になる。しかし「淮」水は徐州、豫州の南部に当たり、「禹貢」のいう青州とは大きくかけ離れてしまふ。そこで鄭司農の注には、「淮は或いは睢爲り、沐は或いは洙爲り」とあるのであろう。淮水が睢水のことであるとすれば、前の盟諸はこの睢水のすぐ北側睢陽から二十キロ程北あたりとなり、「周禮」の記述としてはまとまりを持ってくる。しかしそうなると後文の、「其の浸するは沂沐」というのは合わなくなる。即ち沂も沐も山東半島の近い、鄭注に言う所の東莞附近だからである。しかしそれにしても鄭注の沂水についての注「蓋、望諸、明都に在るなり」は意味不明である。恐らく「蓋し、望諸は明都なり」の意味なのであろう。だから鄭司農は、更に、「(明)(都)(史記に言う)は禹貢に孟猪に作る」との注を必要としたのであろう。いずれにしても「周禮」の言う青州は非常に広く、沈州の南、豫州の一部、更に徐州の北部までも含むものになっている。これは「禹貢」と「周禮」のまとめられた時代の地理認識の相異を表わしていて興味深い。

以上まとめてみると、青州は山東半島全域及び、北は濟水、西は

泰山、南は琅邪ぐらゐまでの半島の基底の全域を含む地域である。しかし「周禮」の青州は少し異なっていて、沈州の南豫州及び徐州の北部沂水の流域、新沂のあたりまでも含む地域である。

4、徐州

「本紀」には、「海岱及び淮は維れ徐州なり。淮、沂其れ治め、蒙、羽は其れ載す。大野は既に都にして、東原は平に底す」とある。「集解」には、「孔安國曰く、東は海に至り、北は岱に至り、南は淮に及ぶ」とある。この場合の東の海は黄海を言う。北は泰山まで南は淮水をその境とする。同じく「集解」に、「鄭玄曰く、地理志に沂水は泰山の蓋縣より出ず。蒙、羽は二山なり。孔安國曰く、二水は已に治まり、二山以って種載す可きなり。また「索隱」には、水經に云く、淮水は南陽、平氏縣胎簪山より出でて、東北は桐柏山を過ぎる。沂水は泰山、蓋縣の艾山より出でて、南は下邳縣を過ぎて泗に入る。蒙山は泰山、蒙陰縣の西南に在り。羽山は東海、祝其縣の南に在りて、縣を廻すの地なり」とある。沂水は前に見たように泰山の南東、沂源、蓋縣あたりに源を發し、東海郡に入つてすぐ治水、朮水を合流し、更に不邳では泗水に注ぎ込んで、臨淮郡に入るとこんどは睢水を合流させて、臨淮郡の中ほどで淮水に流れ込み、そのまま東へ横流して黄海へ注ぐのである。一方淮水の方は、荊州の南陽郡、襄陽市の北東約百キロの所にある平氏から發するように「索隱」にはあるが、淮水の流れる復陽に至るまでに間に桐柏大復山が横たわっているから淮水はやはりこの山中から發する

ものと思われる。淮水はその後豫州汝南郡の南の境に沿って東流し、臨淮郡に入ると一気にそれを横ぎって黄海へ注ぐのである。蒙、羽は「集解」にあるごとく二山の名である。蒙山は、泰山郡の南の端、蒙陰のすぐ南にあり、洙水と治水にはさまれた所である。羽山は東海郡のやや東寄り、祝其の南北約四十キロのあたりである。「五帝本紀」に、「鯀を羽山に殛し、以って東夷を變ず」とあるその羽山である。羽山はすぐ西に沓水の流れがあり、沂水もそう遠くはなく地形的には決して悪い所ではない。ただ山東半島の根かたには北から泰山、蒙山、羽山と三つの山が列んで羽山は三山の中で泰山から最も離れた所にあり、神降の山泰山との対照で、「殛鯀」の地の伝承に選ばれたのであろう。これも沓州、青州に於ける禹貢伝承の一部をなしていると言えよう。「大野既都」について「集解」は、「鄭玄曰く、大野は山陽、鉅野の北に在り、鉅野澤と名づく、孔安國曰く、水の停する所を都と曰う」という。大野澤は、すでに見て来た如く、沓州と青州との境あたりに位置し、徐州からは大部はなれているように思われる。しかしここで大野澤に言い及んでいるところを見ると、「禹貢」の編者の時代的目からみると、この沢も当時としては徐州との州境にも当たっているであろう。「東原」について「集解」は、「鄭玄曰く、東原は地名なり。今東平郡が即ち東原なり」という。東平郡は大野澤の一部を含みながら大野澤の東に隣接するのが東原である。ここも前に見たように沓州の地に入るのではないかと思われる地である。「索隱」に、「張華博物志に云く、兗州の東平郡は即ち尚書の東原なり」とあるのもやはりここが

沓州である可能性の大なることを示している。「正義」に、「廣く平かなるを原と曰う。徐州は東に在り、故に東原と曰う。水は去って已に平復に致し、耕種す可きを言うなり」とある。これは些か解しかねる。徐州は固より東に在るが、それは東平郡の東原とはあまり関係がないように思われる。もと大野澤は更に大きく今いう東原もその沢に含まれており、それがやがて水が去って耕種可能となったから東原と呼ぶようになった、というのが「正義」の後半部の主旨であろうが、それは「禹貢」の文を見ても解せない。「本紀」のこの部分の後文に、「貢は維れ土の五色、羽の賦は夏狄、嶧の陽は孤桐なり」とあり、この「嶧」は秦代の嶧山刻石で有名な山であるが、これについて「正義」は、「括地志に云く、嶧山は兗州、鄒縣の南二十二里に在り」という。更に「集解」に、「鄭玄曰く、地理志に、嶧山は下邳に在り」とある。実は嶧山は二つあり、一つは徐州、東海郡下邳にある所謂葛嶧山のことである。いま一つは孟子の故郷、魯国の中部鄒県にある嶧山である。鄒県の嶧山は兗州、下邳の葛嶧山は徐州である。故にいまここに言う嶧山は下邳の葛嶧山のことであろう。

『呂覽』に、「泗上を徐州と爲す。魯なり」とある。洙水や泗水は黄海に近い所から流れてはいるが、黄海には入らず西流して、冀州の河内郡で黄河に合流し、その黄河は勃海へ出るのである。故に泗水は、上流より下流の方が内陸部へ深く入り込むのである。「泗上」とは泗水の上流の意である。確かに泗上は魯である。しかし徐州即ち魯、とするには徐州は余りに広く、魯は余りに狭い。呂不韋

は魯を徐州の中心地という意味で挙げたのであろうか。魯は周公旦の国であり、孔丘の国であり、孟子の国でもある。しかし地形的には魯は徐州の中心であるとは決して言えない。寧ろ魯はどちらかと言えばやはり兗州ではなからうか。大野澤にしる、東平郡にしる、魯国にしる、それぞれの時代によってその州への帰属が異なったのであろう。その異なりようこそがその時代の地理認識なのである。

『爾雅』は、「濟東を徐州と曰う」といい、郭注は、「濟の東より海に至る」とする。これは非常に広い範囲を表わすことになる。濟の東と言え、『禹貢』に言う青州、『爾雅』自身言う所の營州も含むことになるし、『禹貢』の言う兗州すら含むことになる。しかし、『爾雅』は、濟と河の間のみを兗州とし、營州は濟水の下流の南、及び山東半島部分全体を含んでいるから、それ等を除いた、淮水を南限とする区域が徐州ということになる。春秋期の紀や莒や鄭などの小国を捨消すれば徐州の代表は魯ということになり、『爾雅』はそれ自体として理が立っていると見える。

『周禮』には「徐州」という呼称を持つ州域はない。恐らく長安から「正東」に当たる青州に含めてしまっているのであろう。「其の川は淮、泗」という表現の中にも「徐州」を「青州」の中に包含していることが推察される。これも編者による各時代の地理認識の相違から来るものであろう。

5、揚 州

「淮海は維れ揚州なり。彭蠡既に都となり、陽鳥居する所なり。」

三江既に入り、震澤定を致す。竹箭既に布す。其の草は惟れ天にし、其の木は惟れ喬く、其の土は塗泥たり」と『本紀』にある。

「集解」は「揚州」について、「孔安國曰く、北は淮に據り、南は海に距る」とある。即ち北の州境は淮水で南は福建の海濱に至ることを言ったものである。その範囲は極めて広大である。「彭蠡」について「集解」は、「鄭玄曰く、地理志に彭蠡澤は豫章、彭澤の西に在り」とし、「正義」は、「括地志に云く、彭蠡湖は江州、潯陽縣の東南五十二里に在り」とする。彭蠡は豫章郡の北の端にあり一部は北隣の廬江郡にかかっている。現在の南昌の北約九十キロにある。彭澤はこの南北に長い彭蠡の中段西岸にあり、後六朝期には陶淵明が隠棲して有名になる所である。「都」は「尚書、禹貢」では「豬」に作り、「索隱」は、「孔安國云く、水の停る所を豬と曰う。鄭玄云く、南方は都を謂いて豬と爲すと、則ち是れ水の聚り會すの義なり」と解説している。また「陽鳥の居する所」について「集解」は、「孔安國云く、隨陽の鳥は、鴻鴈の屬なり、冬月に此の澤に居するなり」という。「三江」について「索隱」は、「韋昭云く、三江は、松江、錢唐江、浦陽江を謂う」とするが、松江は現在の太湖から、現在の上海市に当たる海へぬける河川であり、錢唐江は、更に南の、杭州湾の最も奥まった所の現在の杭州市に当たる錢唐附近を流れる江水であらう。また浦陽江は、これも鳥傷あたりから錢唐を経て杭州湾へ流れ込む江水であり、「本紀」後文の「三江既に入りて、震澤定を致す」にはあわない。そこで「索隱」はつづけて、「今按ずるに、地理志に南江、中江、北江有り、是れ三江爲り。」

其の南江は會稽、吳縣の南より、東して海に入り、中江は丹陽、蕪湖縣の西南より、東して會稽、陽羨縣に至りて海に入り、北江は會稽、毗陵縣の北より東して海に入る」としているのである。ここに南江は、韋昭のいう松江に当たり、これは太湖に注ぐのではなく、太湖から海へ注ぐ河川である。中江は長江から分岐した流れで、蕪湖、溧陽、陽羨を経て太湖へ注ぐのである。北江は、太湖から黄海へ流れ出す江水で後には蘇州から無錫、毗陵を経て曲阿に至る運河として活用された流れであろう。しかしこのあたりの地形は複雑で古来多くの議論のあるところである。「震澤」についての「集解」は、「孔安國曰く、震澤は吳の南の太湖の名なり」、「索隱」には、「又左傳に笠澤と稱するは、亦た此を謂うなり」のあと「正義」は、三江について述べるところすこぶる多い。

「澤は蘇州の西南四十五里に在る。三江は、蘇州の東南三十里に在りて、三江口と名づく。一の江は西南より上ること七十里にして太湖に至り、名づけて松江、古くは笠澤江と曰う。一の江は東南より上ること七十里にして白蠅湖に至り、名づけて上江と曰い、亦た東江と曰う。一の江は東北より下ること三百餘里にして海に入り、名づけて下江と曰い、亦た婁江と曰う。其の分つ處を號して三江口と曰う。顧夷吳地記に云く、松江は東北へ七十里行きて、三江口を得。東北より海へ入るを婁江と爲し、東南より海へ入るを東江と爲し、松江と并せて三江と爲すというは是れなり。言う理は三江は海に入りて、震澤に入るには非ざるなり。按ずるに、太湖西南の湖州の諸溪は天目山より下り、西北の宣州の諸山に溪有り、並に太湖に

下る。太湖の東北の流れは、各々三江口に至りて海に入る。其の湖は、彭蠡湖及び太湖に通る處無く、並に山陸を阻つ。諸儒及び地志等、「三江既に入る」と解するが皆非なり。周禮職方氏に云く、揚州の藪を具區と曰い、川を三江と曰うと。按ずるに、五湖、三江は韋昭の注の非なり……議論はまだまだ続くが、要するにこの一帯は長江によって運ばれた土砂が堆積した中洲地帯であつて、時期、時代によつて、沢や湖や川筋も大きな変化を予儀なくされたであろうから、その時期を特定しないで、それぞれの位置関係を明らかにすることは困難なことであろう。

『呂覽』は揚州について、「東南を揚州と爲す。越なり」としている。これは秦の都、咸陽からみて揚州は確かに東南である。しかし越は会稽郡に沿った割り合い海岸に近い方であり、この場合の揚州には内陸の九江郡や豫章郡も含まれている。

『爾雅』には、「江南を揚州と曰う」とあり、郭注には、「江南より海に至る」とあつて『呂覽』より一層大雑把な言い方になっている。

『周禮』は、「東南を揚州と曰う。其の山鎮を會稽と曰い、其の澤藪を具區と曰う。其の川は三江、其の浸するは五湖なり」とする。この揚州の規定は『呂覽』と同じである。周の都と秦の都は同方向にあることによるのである。会稽山は杭州湾を隔てた南にあり、所謂会稽郡都は震沢の東のほとりに有つて両者は相当離れている。具區は、『本紀』の「索隱」に、「地理志の會稽吳縣に、故し周の泰伯の封せられし國、具區は其の西に在り、古文は以つて震澤と

爲す」とある。またここに言う「三江」、「五湖」については、同じく「本紀」の「正義」に、「按ずるに、五湖、三江は、章昭の注の非なり。其の源は俱に太湖に通ぜず、引きて「三江既入」を解せば之を失うこと遠し。五湖とは、菱湖、游湖、莫湖、貢湖、胥湖で、皆太湖の東岸なり。五湖を五湖と爲も、蓋し古時には別たるべし。今は並に相連なる」とある。地形は極めて複雑である。『史江・貨殖列伝』に、「夫れ呉に三江、五源の利有り」とあり、また「太史公自敘」にも、「姑蘇に登りて、五湖を望む」とあるから、三江、五湖の言い方は漢代以降のことなのであろう。

6、荊 州

「荊及び衡陽、維れ荊州なり。江、漢海に朝宗す。九江甚だ中にして、沱、涇已に道びかれ、雲土、夢治まると爲す。其の土は塗泥」以上が「本紀」の文である。

「集解」に、「孔安國曰く、北は荆山に據り、南は衡山の陽に及ぶ」とある。荆山は、現在の襄樊市の南西約七十キロの所にある。衡陽は、現在河北省の衡陽市附近で、その北約三十五キロの所に衡山がある。この二山にはさまれた地域が荊州であるとす。 「江、漢」について「集解」は、「孔安國曰く、二水は此の州を經て海に入る。朝するに似たる有り。百川海を以てて宗と爲す。宗は尊なり」とし、「正義」に、「括地志に云く、江水の源は岷州の南、岷山に出ず。南流して益州に至り、即ち東南流して蜀に入り、瀘州に至り、東流して三硤を經て、荊州を過ぎ、漢水と合す。孫卿子云く、

一一一

江水、其源は以て濫傷とす可きなり。又云く、漢水の源は、梁州、金牛縣の東二十八里、嶓冢山に出ず」とある。岷山は現在の四川省の北端と甘肅省との境に横たわっている。江はこの岷山から岷江として南流して蜀都に入り、更に南流して南安樂山市で 水、青衣水と合し、更に南流しつづけて、宜賓市で長江に注ぐのである。

長江は更に西から宜賓へ流れて来るのであるが、だいたいこのあたりから江水と呼ばれているようである。江水は東流し、巴都、臨江を經て、雲夢の沢を越えたあたりで、北から漢水の流れを迎え入れるのである。漢水が長江に合流する五十キロ程上流で、長江は南方から北流して来た湘水を受け入れ、その湘水の上流で来水と合流する地点が衡山であり、衡陽である。「九江甚中」について「集解」は、「孔安國曰く、江は此の州界に於て、分れて九道と爲り、甚だ地勢の中を得。鄭玄曰く、地理志に、九江は尋陽の南に在り、皆東に合して大江と爲る」とある。この部分『尚書、禹貢』には、「九江孔だ股んなり」とあり、「中」は「股」の意味であるらしい。そしてそれは江水が漢水と合してから尋陽にさしかかるまでの極めて短距離の間に多く支流を受け入れて、その水量はいよいよカサを増していくことを言ったものであろう。「沱、涇」について「集解」は、「沱は江の別名。涇は水名。鄭玄曰く、水は江より出でて沱と爲り、漢は涇と爲る」とある。「素隱」には、「涇は亦た潛に作る」とし、『爾雅、釋水』には、「水は河より出でて澗と爲り、濟は澗と爲り、汝は澗と爲り、洛は波と爲り、漢は潛と爲り、淮は澗と爲り、江は沱と爲り、過は洵と爲り、潁は沙と爲り、汝は澗と爲る」とあ

ってそれを裏つけている。また『尚書・禹貢』にも、「岷山は江を導き、東に別れて沱と爲る」とあって、これも孔安國の解をうらづけている。「雲土、夢」について「集解」は、「孔安國曰く、雲夢の澤は江南に在り。其の中に平土の丘有り、水去って、耕作畝畝の治を爲す可し」とある。雲土、夢は普通には雲夢と呼ばれ、宋玉の『高唐賦』『神女賦』の舞台として有名であり、また近年雲夢睡虎地竹簡の出土地としても名を知られている。「索隱」には、「夢は一に曹に作る。按ずるに、雲土、夢はもと二澤の名、蓋し人二澤を以って相近し、或いは合せて雲夢と稱するのみ。知者、左傳に云く、楚子江を濟りて雲中に入り、又楚子鄭伯江の夢に田すとあるに據りて、則ち是れ二澤は各々別とするなり。韋昭曰く、雲土は今縣と爲り、江夏、南郡の華容に屬すと。今按ずるに、地理志に云く、江夏に雲杜縣有り、是れ其の地なり」とある。

『呂覽』には、「南方を荆州と爲す。楚なり」とある。楚は『楚辭』の世界、屈原が活躍したのは楚の中心部、雲夢澤の西の端にある南郡、江陵、郢の地である。雲夢澤の南には洞庭湖がありその更に南に屈原終焉の地、汨羅がある荆楚は常に一語として用いられる。

『爾雅』には、「漢南を荆州と曰う」とあり、郭注には、「漢より南して衡山の陽に至る」とある。漢水は夏水として雲夢北部に食い込んで流れるが、その夏水に切り取られた雲夢の北部、夏水の北、安陸、江夏なども荆州に含まれているであろう。

『周禮』には、「正南を荆州と曰う。其の山鎮は衡山と曰い、其

の澤藪は雲夢と曰う。其の川は江漢、其の浸するは潁湛なり」とある。これは『尚書、禹貢』、「夏本紀」とほぼ同範圍を示している。ただ「正南」という言い方は、周の都のすぐ南を表わしているのではなく、周のすぐ南の河南の地、即ち豫州を中に置いてその更に南の地を指している。鄭注には、「衡山は湘南に在り。雲夢は華容に在り。潁は陽城より出ず。宜しく豫州に屬すべし。此に在るは非なり。湛は未だ聞かず」とある。潁水は豫州の西端、潁水郡の北端、太室山にその源を發して陽城、潁陽を経て更に博陽、頂縣、都尉を通じて南流し、陽泉の少し下流の所で淮水に注ぐのである。よってこの河水は豫州を出ることなく、荆州に入ることはない。鄭注はそれを言っているのである。

以上まとめてみると、荆州というのは北は荆山附近から南は衡山のあたりまでということであるが、この二山を結ぶ線を荆州の縦中線と考えるにしても、横の広がりがどこまでなのかは定かではない。荆州は「禹貢」の九州の中では最も南方に位置する。しかし、「禹貢」が漢水と江水を挙げているように、当時の荆州の認識も恐らく漢、江の流域、即ち雲夢を中心とした地域より北の部分で、それより南は異民族の地であったに違いない。衡陽は最南端の認識可能地であったであろう。

(以下次号につづく)

(一九九〇年十月十二日受理)